Osaka University Knowledge Archive

Title	コロナ禍が大学生に与えた影響 ： 日本とインドネシアを比較して
Author(s)	
Citation	令和4（2022）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2023
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90962
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式６

申請先学部　外国語学部　採択番号　No.外１

令和４年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	きた　ひであき 北　英明	学部 学科	外国語学部インドネシア語専攻	学年	３年
ふりがな 共同 研究者氏名	おおつか　たくみ 大塚　匠	学部 学科	上記同様	学年	３年
	こばし　れな 小橋　礼奈		上記同様		３年
	たかはし　ゆづき 高橋　優月		上記同様		３年
	ほりぐち　あいか 堀口　愛花		上記同様		３年
	やまだ　ももえ 山田　百笑		上記同様		３年
	いとう　さとこ 伊藤　咲都子		上記同様		３年
アドバイザー教員 氏名	すがはら　ゆみ 菅原　由美	所属	人文学研究科外国学専攻		
研究課題名	コロナ禍が大学生に与えた影響－日本とインドネシアを比較して－				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

成果報告

1.　研究目的

全世界が共通して経験した新型コロナの問題が全世界の若者に同じ影響を及ぼしたのか、それとも国や地域による違いも生じているのか、もし生じているのであれば、何が違いを生じさせる原因となるのかという点について、日本とインドネシアのケースを比較し考察する。

2.　研究計画・方法・経過

① 現地調査

日程：2022 年 9 月 14 日～26 日（調査日 9 月 16 日～24 日）

場所：インドネシア、ジョグジャカルタ特別州、国立ガジャマダ大学（阪大大学間協定校）

対象・手法：①約 1 週間、学生各大学 30 名程度を対象として、グループでインタビューを行った（使用言語：インドネシア語）。日本人とインドネシア人各 3~4 名名ずつのグループを作り、コロナ禍で生じた状況・問題（授業、学生生活、金銭面）とそれぞれの項目に対して学生がどのように考えているのか、またコロナ禍で生じた問題に対処する試み等について調査した。インタビューをする際には、日本での状況も説明し、日本とインドネシアの比較をグループ内でできるようにした。ガジャマダ大学で、インタビュー内容の暫定的なまとめを、日本での状況と比較しながら、発表し、その上で、学生たちとオープン・ディスカッションを行った。なお、予定していた国立イスラーム大学ジョグジャカルタ校（外国語学部協定校）ではインタビューを行うことができなかった。

② アンケート調査

日程：2022 年 11 月～12 月

対象・手法：ジョグジャカルタでおこなったインタビューと同じ内容を尋ねる Google フォームを作成し、スマトラ島西部地域パダンの国立アンダラス大学（外国語学部協定校）、スマトラ島最北端アチェの国立イスラーム大学シャ・クアラ・アチェ校（外国語学部協定校）の学生を中心に回答をお願いした。両都市ともに、スマトラ島の代表的な都市である。

追記：これは当初予定していなかった調査であるが、ジョグジャカルタの調査において、比較対象として他地域の調査を行う必要性が生じたため、アンケートを用いて調査を追加で行うこととした。

3.　研究成果

①　インドネシアのコロナ概要と学生生活

まず初めに、インドネシアにおけるコロナの概要を説明する。インドネシアでコロナの感染拡大が始まったのは、2020 年の 3 月半ごろからである。感染の拡大のピークが最初に訪れたのは、2021 年 7 月後半である。その後のピークは 2022 年 3 月頭からである。インドネシアのコロナ感染症に対する政策に関しては、当初インドネシア政府は後手に回った。ジョコ・ウィドド大統領は 2020 年 4 月 10 日に国民の社会経済活動を制限する行動制限（Pemabatasan Sosial Berskala Besar　略称：PSBB）を実施した。これは欧米で実施されていた強制力を持ったものではなく、日本の緊急事態宣言に似た、国民や企業の自主的な自粛措置であった。しかし、その後この政策によって経済成長が落ち込み、大規模社会制限を実施したり、制限を止めたりなど、日本の緊急事態宣言の発出状態と似たような状況であった。

　インドネシアにおけるマスクに関する状況としては、PSBB の中にマスクを着用する義務が盛り込まれた。インドネシアにおける PCR 検査の状況は、インドネシアで行われている検査は、RT－PCR による核酸増幅検査、迅速抗原定性検査（ラテラルフロー）である。これらの検査は、国により上限

価格が設定されており、PCR 検査が 27 万 5,000 ルピア、迅速抗原検査が 9 万 9,000 ルピアとなっている。PCR 検査はおおむね 24 時間で結果が判明し、抗原検査は 3 時間程度で結果が判明する。国内移動規制に関しては、交通手段、地域、ワクチン接種回数によって異なるものの、市境・県境を越える国内移動にあたっては、原則、PCR 検査または迅速抗原検査の陰性証明書が必要となり、それを確認するためにアプリを使用した。

全国の大学は 2020 年 3 月から、2 年間キャンパスを封鎖したため、この間学生はすべてオンラインでの授業を受講することとなった。

②　　インタビュー及びアンケート調査結果

上記のインドネシア国内でのコロナ状況の中、インドネシアの大学生が実際どのようにコロナを捉え、コロナ禍をどのように過ごしてきたのかをインタビューとディスカッションを通じて聞き取り調査し、彼らに与えていた影響を考察した。私たちは、大きく分けて六つの観点からの質問をし、ディスカッションを行った。6 つの観点とは、①行動制限②経済政策③マスク④ワクチン⑤コロナという病気に関して⑥授業の ICT 化である。そのインタビュー調査後、ジョグジャカルタ外に住む学生にも調査を行った。調査は Google form のアンケート機能を用いて実施し、128 名からの回答を得た。ここでは本来の調査対象であったガジャマダ大学でのインタビューとディスカッションの結果とともに、スマトラ島で実施した大学生へのアンケート結果も記載する。

ⅰ)行動制限

行動制限に関して、私たちは 2 つの質問をした。1 つ目の問いは「行動制限は効果的だったと思うか。」である。この質問に対して、ガジャマダ大学の学生の回答者ほとんどが「効果的だったと思う。」と答えていた。なぜ効果的だと思うかと掘り下げていったところ、「政府によって人流が抑制されたことで、コロナの感染が抑えられたのではないか。」、「コロナの感染は人が移動することで拡大するから、その人の移動を制限することは大切だったと思う。」との答えが続いた。続いて、2 つ目の質問として「行動制限期間はどのように思っていたか。」と尋ねた。それに対する回答として、ガジャマダ大学の学生は「行動が制限され、ものが届かなくて苦しいが、（行動自粛は）やらなければいけないことだと思っていた。」と答えが得られた。これに関するディスカションの中で、「ものが届かない状況は生活に支障をきたすのではないか。」と質問をしたところ、「そんなことはない。物資は近くの pos という建物に週に何度か配られ、確かに面倒だけれども、そこに行き、ものを得ることができるから大丈夫であった。」と、やはり肯定的な回答が返ってきた。

スマトラ島 2 都市の大学で実施したアンケートでは、「行動制限は効果的だったと思うか。」という質問に対して最も多かった回答は「やや効果的だった（58%）」で、「十分に効果的だった（7%）」と並んで行動制限を肯定的に捉える回答が半数を超えた。しかしその一方で、ガジャマダ大学の回答者では見られなかった「それほど効果的ではなかった（25%）」「効果的ではなかった（7%）」という回答も見られた。

ⅱ)経済

コロナ禍の経済に関して、私たちは 3 つの質問をした。1 つ目の質問は「行動制限の最中、インドネシアの経済成長は止まったと言われているが、実際に経済が止まったと感じたことはあるか。」である。この質問に対してガジャマダ大学の学生の多くは「経済成長は止まったが、衰退まではしていないのではないか。」と答えた。しかし、中には「行動制限によって家庭の経営が立ち行かなくなった。

特に、自分の家庭では野菜を育て市場で売ることを生業としていたため、経済状況は非常に厳しいものだった。」と答える学生もいた。

私たちは、アンケート調査で同じ質問をスマトラ島の学生に尋ねた。一つ目の質問に対し、「経済成長は止まった（6%）」と答えた人よりも、「経済成長はやや衰退した（33%）」「経済成長は衰退した（58%）」と回答した学生の方が多数派であった。

話を聞くなかで、経済成長の変化の感じ方には、家庭状況の差異が影響を与えていると考え、続けて私たちは 2 つ目の質問として「自分の家庭はコロナの行動制限中に経済的に苦しくなったか。」という質問をした。すると、養鶏家や農家を生業とする家庭の学生からは、市場が閉鎖されてしまい生産品を売ることができず、家庭が苦しい状況に陥ったという意見が挙がった。一方で、大多数の学生は、家族の職業は民間の会社で働くオフィスワーカーであるためそこまで経済的に苦しくならなかったと回答していた。また、中には親が軍隊などに所属する公務員であるため、逆に仕事が増え給料が増えたので家庭の状況は良くなったという学生が 1 人いた。スマトラ島でのこの質問に対する回答では、「変化はなかった（27%）」という回答よりも「やや悪化した。（47%）」「かなり悪化した。（24%）」という回答の方が多かった。「良くなった」と回答したのは 2 人で、全体の 1%だった。

3 つ目の質問は、「政府による経済回復政策によってインドネシアの経済が回復したと思うか。」である。この質問に対してガジャマダ大学の学生はほとんどが「良くなった。」あるいは「少しずつ良くなっていったと思う。」と回答した。一方スマトラ島の学生に尋ねたアンケートでは、「変わっていない。（59%）」という意見が最も多かった。コロナ禍の経済に関する質問に対しては、どの項目においてもガジャマダ大学の学生とスマトラ島の学生でアンケート結果に差が見られた。

ⅲ）マスク

マスクに関して、私たちは 2 つの質問をした。1 つ目の質問は、「マスクをつけることに抵抗はあったか。」である。感染拡大初期と現在の 2 つの時間に焦点を当ててこの質問を尋ねると、「最初はマスクをつけることに抵抗があったが、徐々に慣れていった。」と大半が述べた。抵抗を感じた理由としては、着用時の息苦しさやつけ忘れに対する面倒さを挙げた意見が挙げられたが、マスク着用を推奨されることに疑問を感じたという意見や本当は抵抗があるが着用を強制されているという意見はなく、現在では抵抗感はないと全員が答えた。

スマトラ島でのアンケートでは、感染初期では「最初から抵抗感はなかった（49%）」という回答と「抵抗感はあったが従わなければならなかった（38%）」という回答が多かった。現在では「抵抗感はない（60%）」という回答が最も多かったが、次いで「抵抗感がある（20%）」「抵抗感はあるが従わなければならない（7%）」「抵抗感がある（20%）」「強い抵抗感がある（５%）」という回答が続いた。

2 つ目の質問は「マスクをつけていない人を外で見た時どのように思ったか。」である。これに対して、マスクをつけていない人を外で見た時、「コロナがうつるのでは」と怖くなるという意見が挙げられた。一方で、ある女子学生は「怖いという感情よりも、マスクを外している人を見ると怒りが湧いてきた。」と答えた。その理由を尋ねると、「自分は健康プロトコルを遵守しているのに、規則を守らない人のせいでコロナが拡散される可能性があるから腹がたった。」と述べた。しかし、現在では、屋外で人と密接な状況でなければマスクを着用する必要はないという政府からの方針が出されていることもあり、気にしないという意見も多かった。

スマトラ島の学生に同様の質問をしたところ、マスクをしていない人を見た時に関しては、「気にしない（67%）」という回答が最も多かった。インタビューでの回答と同様に、「怖い（22%）」「怒りを感じる（3%）」いう回答もあった。ジョグジャカルタの学生ほど他人のマスク着用を気にしていない

結果が得られた。

ⅳ）ワクチン

ワクチンに関して、私たちはワクチンの接種回数とその回数の理由を中心にインタビューとディスカッションを行った。接種回数に関しては大半が３回接種しており、２人だけが２回のみの接種だった。３回接種をした人に対して「なぜ３回接種したのか」を尋ねたところ、多くの学生から一番はじめに挙げられた理由は、「政府から３回接種するように奨励されているから」だった。それに続いて、「ワクチンを３回接種済みでないとショッピングモールや地方に行くことができないから」だという理由も挙げられた。接種が２回のみだった２人のうち１人は、持病があり、新たにワクチンを打てる状態にないためだと回答した。もう１人は、自分が住んでいる自治体に３回目のためのワクチンがいまだに行き届いていないために接種することができないと回答した。そこで、彼女にもしワクチンが用意されたら３回目の接種をしたいかと尋ねたところ、したいと回答し、その理由は３回接種した人の回答と同様のものであった。スマトラ島でのアンケート調査では、接種回数が「２回接種済み（65%）」という回答が最も多く、ガジャマダ大学では見られなかった「0 回（7 %）」「1 回（11%）」という回答も見られた。「3 回（17%）」と回答した学生の割合は、ガジャマダ大学での調査と比べて少なかった。接種回数が 2 回以下の理由を尋ねる質問には、「副反応が怖いから。」「ワクチンそのものに効果をあまり感じないから」「コロナに罹患したことがないから接種する必要はない。」という回答が得られ、２つの調査で得られた結果には大きな差異が見られた。

ⅴ）コロナという病気に対する恐怖

コロナという病気に対して、コロナをどのような病気として捉えていたかをテーマに、インタビューとディスカッションを行った。すると、最初は怖いと思っていなかったが、次第に他の病気とは異なりとりわけ恐ろしい病気だと認識するようになったという回答が大多数を占めた。このように心境が変化したきっかけとして、学生たちは死者数や感染拡大状況に関するニュース報道、身近でコロナに罹患する人の存在に言及していた。中には「コロナは自然の循環の中の病気の一つだ。」と回答する学生もいたが、この意見は非常に少数だった。

続いて、現在におけるコロナに対する認識を尋ねたところ、現在はもう怖くないという人がほとんどであった。この意見について深掘りして尋ねると、ほとんどが「ワクチンが開発されて、ワクチン接種も進んだから怖くなくなった。」と回答した。そしてその内半数ほどが、ワクチン接種が進んだことによって免疫を得たため既に安全だと答えていた。

スマトラ島での回答においても、感染拡大当初は「ニュース報道を見て怖くなった。（60%）」が、現在は「今は普通の病気の一つとして考えている。（75%）」という回答が最も多かった。コロナを怖いと感じない理由として「ワクチンが開発されたから（30%）」「免疫を獲得したから（43%）」が挙げられたことも共通した。しかし、上記の理由に当てはまらない自由回答欄には、「コロナはただの病気に過ぎないが、恐れれば恐れるほどますます広がるものだ。だから、健康プロトコルを守りつつも、いつも通りの気持ちを保っている。」「コロナとは思想や暗示からくる病である。」という意見が挙げられた。また、「コロナは政府が作った幻想の病気であり、政府は民衆に薬を売りつけることで利益を得ようとしている。コロナは政治的なものであり、病気ではない。」という回答も見られた。さらに、「コロナという病は、神アッラーによってもたらされたものであり、自分が恐れるのは神だけだ。」など、神アッラーに言及した回答が複数人から挙げられた。このような回答はガジャマダ大学では聞いたことがなかった。

ⅵ）授業の ICT 化と学生間の交流問題

最後に授業の ICT 化をテーマにインタビューとディスカッションをした。大きく分けて、ICT 化による学習面での影響と友人との交流面の 2 つに分けてインタビューとディスカッションをしていった。

学習面では、「インターネット環境が周りと比べて自分は整っていたと思うか。」・「授業がオンラインになり、授業の質が低下したと思うか。」・「授業がオンラインになり、家庭学習の質が低下したと思うか。」という 3 つの質問をした。1 つ目のインターネット環境については、インタビューに回答したガジャマダ大学の学生のほとんどが、「周りと比べると自分のネット環境は良かったと思う。」と答えた。続く質問で、授業の質と家庭学習の質を尋ねると、ともに低下したという回答が大多数を占めた。理由は、「オンライン授業だと集中できない。」「授業中に他のことをやっていてもバレることはないからサボってしまう。」と回答があり、中には、「家庭学習の量は増えたが質は下がった。自分ひとりで行う学習や課題が増えて負担になった。」と回答した学生もいた。

スマトラ島でのアンケートでは、1 つ目の問い「インターネット環境が周りと比べて自分は整っていたと思うか。」という質問に対して、「自分の環境は他の人よりもかなり良いと思う。(4%)」「良いと思う。(48%)」と答え、自分のインターネット環境を肯定的に捉える声が半数を超えた。「良くも悪くもない（19%）という回答が次に多く、「悪いと思う（2%)」「かなり悪いと思う（5%)」という回答も挙げられた。インターネット環境はジョグジャカルタとスマトラ 2 地域との間で大きな差はなかったようである。

授業の質に関する回答には、「下がった（43%)」という回答が最も多かった。その他「良くなった（6%)」「やや良くなった（26%)」「変わらなかった（22%)」という回答のばらつきがあった。家庭学習の質に関する回答は、「やや低下した（42%)」「かなり低下した（8%)」という回答が多く見られた一方で、「かなり向上した（3%)」「向上した（26%)」という回答や「変わらなかった（21%)」という回答が見られ、やはりばらつきが大きかった。

次に、友達との交流に関して、私たちは 4 つの問いについてインタビューとディスカッションを行った。まず、1 つ目の問いとして、私たちが対面とオンラインそれぞれにおける交流の増減について尋ねると、対面の交流は減ったがオンラインでの交流は増えたという意見を回答者全員が共通して持っていることが判明した。これを受けて、2 つめの問いとして「全体として友達同士の交流は増えたのか、減ったのか」というテーマで意見交流をしたところ、大半が「総合的に見ると、コロナ禍になってから友人同士での交流は減った。」と述べた。さらに、3 つ目の問い「もし対面で会っていたら、もっと簡単に友達を作ることができたと思うか」に関しては、ほとんどの人が「対面であればもっと簡単に友達を作ることができたはずだ」と回答した。その理由として、「オンライン上の交流では、名前と顔は知っている状態にはなるが、実際に会って話した方がその人の内面をより知ることができて親密になることができたと思う。」という意見が挙げられ、その意見に賛同する人がほとんどであった。4 つ目の問として、「大学入学してから、いつ友達ができたか」というテーマでインタビューとディスカションをしたところ、「すぐに友達を作ることはできず、対面授業が始まってから数ヶ月してやっと友達ができた。」と回答する人が大半を占めた。中には「大学に入学してすぐ友達はいたが、それはたまたま地元が一緒だったからであり、大学入学後に大学での友達ができたのはみんなと同じで、対面授業が開始されてから間も無くしてからであった」と述べた学生もいた。

スマトラ島におけるアンケート調査では、1 つ目と 2 つ目の問いに対して、対面での交流が減り、オンラインでの交流が増えたが、総合的に見ると、友人同士の交流は減ったという回答が半数を超え

ており、ジョグジャでの調査結果と共通していた。オンラインでの交流が「増えた（20%）」という回答もあったが、総合的に見ると、友人同士の交流は減ったという回答は半数を超えていた。3 つ目の問いである「もし対面であればもっと友達を作ることができたと思うか」という質問に対して、「対面であればもっと多くの友達を作ることができた（72%）」という回答が最も多かった。最後に、4 つ目の問い「大学入学してから、いつ友達ができた」という質問に対する回答では、「大学入学前から（23%）」「大学入学後のオンライン授業中に友達ができた（28%）」「オンライン授業が終わり、授業が対面で始まってから友達ができた（26%）」と回答にばらつきがあった。

③　　考察・まとめ

まとめ

ⅰ)行動制限

ジョグジャカルタでは程度の差はあれ、政府の政策（PSBB）を肯定的に捉える声が多かった。行動が制限された状況自体は、日本の学生が置かれた状況よりもさらに厳しかったことがわかったが、彼らからは不平や不満の声は聞こえてこなかった。一方、スマトラでは、政策は効果的ではなかったと感じる人も一定数いた。

ⅱ)経済

ジョグジャカルタでは、社会全体としての経済状況は、停滞はしたものの悪化したわけではないと述べる学生が多かったが、スマトラ島では成長が止まっただけでなく、経済が衰退したと答える割合が非常に高かった。また、それに伴って、経済状況の悪化を感じたという回答が多かった。スマトラ島の学生の回答では、政府による経済回復政策の効果をあまり実感していないという回答が多かった。

ⅲ)マスク

ジョグジャカルタでは、最初は抵抗感があったという意見も見られたが、その理由を尋ねると、慣れないマスク着用による違和感のような感想が多かったが、着用を促されること自体に対する抵抗感を示す声は上がらなかった。一方、スマトラ島では最初から抵抗感がなかったという回答と、抵抗があったが従わなければならなかったという回答の割合にあまり差がなく、ジョグジャカルタの学生ほど他人のマスク着用を気にしていない状況が見られた。

ⅳ)ワクチン

顕著な差として、ジョグジャではほぼ全員が 3 回接種済みであるのに対し、スマトラでは 2 回以下の接種のみの回答者が 8 割を超えた。接種の理由を尋ねると、ジョグジャカルタでは、政府から 2 回以上の接種が要請されており、3 回以上の接種が奨励されているからだという意見が真っ先に挙げられた。物理的・身体的障害が生じなければ、接種を受ける心理的ハードルはあまり高くないようだった。一方、スマトラ島では、接種回数の少ない回答者にその理由を尋ねるとワクチンの効果や副反応に対して疑問を感じる声が挙がった。

ⅴ)コロナという病気に対する恐怖

ジョグジャカルタ、スマトラ島で共通したのは、コロナという病気を脅威に感じるようになったのはニュース報道などで見聞きした情報が大きく影響を与えており、現在ではあまり怖くなくなった要

因としてワクチンの開発と接種の開始があったことである。ジョグジャカルタでのインタビューでは、コロナを怖がる感情が落ち着いた理由として、ワクチンによる免疫獲得や重症化軽減に期待する声よりも、ワクチンの存在そのものに安心感を抱いている声が多かった。また、スマトラ島での調査で新たに判明したこととして、コロナは人々の暗示や政治的思惑によって必要以上に怖がられているという意見があった。さらに、コロナという病を神アッラーがもたらしたものであり、神の意志であるとする回答もあった。

vi）授業 ICT 化と学生間交流

学生たちは全国におけるインターネット環境差の問題について意識はしていたが、自分たちのインターネット環境について尋ねた質問には、両地域とも自分の環境を比較的良いと答える回答が多かった。これらの認識は主観に依るところが大きいと考えられるため、実際の学生のインターネット環境の差については調査不足であるが、どちらにもおいてもこの点に関する不満は見られなかった。授業と家庭学習の質に関して、ジョグジャカルタでは、ほぼ全員が質の低下を感じていたが、スマトラ島では意見にばらつきが見られた。これに関しては、何が原因であるかまで明らかにすることはできなかった。学生間の交流については、スマトラ島の学生の方が対面開始以前にすでに友人との交流が始まっていた割合が高かった。

(考察)

日本では、コロナ禍での経済政策や行動制限について不満を持つ若者が多く、政府の要請に従わない人も多くいた。しかし、ジョグジャカルタで得られた回答では、行動制限の状況は日本とほぼ同じ、またはより厳しかったにも関わらず、政府の決定には従順に従い、その決定には何か理由があるのだろうという考えを持っている学生がほとんどであったため、若者の不満について調べようと考えていた当初の我々の予測とはまったく異なる結果となった。また、30 名の大学生に質問したにも関わらず、回答にあまり違いがでなかった点、自分達がこのパンデミックを無難に乗り切ることができたという自負が共通して見られた点も特徴的であった。この結果について、ガジャマダ大学はジャワ人の古都ジョグジャカルタに位置する、インドネシア屈指の大学であるため、政府が正しいとする保守的なエリート意識や、上に従うことを是とするジャワ人気質が強く反映した結果になったのではないかと推測した。

そのため、私たちは Google フォームでのアンケートを用いて、スマトラ島の 2 つの主要都市の国立大学で調査をした。スマトラ島での調査では、経済状況がジャワに比べ、衰退していたと感じていた学生も多く、「政府の方針は正しいと思ったから従った（47%）」と「政府の方針には懐疑的だがみんながやっているからやった（45%）」が拮抗していた。ワクチン接種に対しても、ジョグジャカルタの学生ほど従順に 3 回接種を行ったというわけでもなかった。授業のインターネット格差については、総じて授業の質の低下を気にしてはいたが、主要都市の学生であったために、インターネット環境は悪くはなく、オンライン授業に関する政府や大学に対する怒りは見られなかった。学生間の交流も対面が始まってすぐに開始できたために、問題とされていなかった。

総じて、ジャワ島ジョグジャカルタとスマトラ島のパダンおよびアチェの学生では政府の政策に従ったことには変わりはないが、スマトラ側では政府の政策に抵抗を感じながら、従っていた側面がみられ、宗教的な解釈によってコロナを乗り切ったという意見も見られた（こうした捉え方は、2004 年 12 月のスマトラ沖津波でもアチェにおいてよく見られた）。このことから、同じインドネシア国内でも地域によってはコロナに対する捉え方には違いが生じていたことがわかった。

調査から得られた今後の課題点
最後に、本研究における課題点についても言及する。
・個人で聞くのとグループで聞くのはまた別の結果が得られた可能性があること
・スマトラではインタビューを行うことができなかったこと
・情報提供者の人数に偏りが生じてしまったこと
・ネット環境に関しては、おそらく比較的整った人たちに聞いたので、実際にネット環境が整っていない地域の人々にも聞いてみる必要があること
上記の 3 点についてより詳しく調査することができれば、同じ国でも地域によってコロナに対する大学生の考え方、捉え方の違いをより明らかにすることができるのではないかと考えた。

4.　　参考資料

・REUTERS Covid-19 Tracker「インドネシアにおける新型コロナウイルス感染状況」
https://www.reuters.com/graphics/world-coronavirus-tracker-and-maps/ja/countries-and-territories/indonesia/

・川村晃一・浜田美紀. 2021.「感染症の蔓延抑制に失敗するも、投資環境改善に向けてオムニバス法が成立」『アジア動向年報』pp. 365-394.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/asiadoukou/2021/0/2021_365/_pdf/-char/ja

・厚生労働省. 白書. 2021 年海外情勢報告「インドネシア共和国における新型コロナウイルス感染症の状況～ コロナの感染拡大防止に向けた取り組み ～」
https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/22/dl/c4-06.pdf

・JETRO　八木沼洋文　ビジネス短信「マスク着用義務など新型コロナ対策を 11 月 7 日まで延長（インドネシア）」2022 年 10 月 11 日
https://www.jetro.go.jp/biznews/2022/10/49a5dcbd2c5e88f6.html